

<実践報告>

ICT を活用した地域文化資産の教育  
ー長野文学散歩の実践を通してー

小林比出代 信州大学学術研究院教育学系

友田義行 信州大学学術研究院教育学系

西 一夫 信州大学学術研究院教育学系

Education on Regional Cultural Resources Using ICT  
ーThrough the Practice of a Walk Through Literary Naganoー

KOBAYASHI Hideyo: Institute of Education, Shinshu University

TOMODA Yoshiyuki: Institute of Education, Shinshu University

NISHI Kazuo: Institute of Education, Shinshu University

研究の目的	ICT を活用した地域文化資産が持つ価値の再認識を促す学習プログラムの開発
キーワード	教科連携 地域文化資産 主体的な学び 文学散歩 ICT 活用
実践の目的	「主体的・対話的で深い学び」の実現
実践者名	執筆者と同じ
対象者	国語教育コース2年生（22名）、他コース2年生（1名）、4年生（1名）
実践期間	2017年6月～8月
実践研究の方法と経過	協働学習スペースを活用した事前学習、文学散歩、ICT を活用した紹介作品の作成
実践から得られた知見・提言	教員養成学部における実践的な学習と専門的な学習との有機的接合、授業間連携や関係施設との連携

## 1. 研究の背景及び目的

### 1.1 学習指導要領の改訂

本年 3 月に小学校・中学校の学習指導要領の改訂内容が公表された。今回の改訂では「資質・能力」を基盤とする教育が目指され、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」が主要な柱と位置付けられた。また「子ども達が未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成」することが基本的な考え方として示され、先の 3 つの柱によって主体的・対話的で深い学びの実現が目指されている。特に学習の基盤となる資質・能力では言語能力や情報活用能力が例示されており、教科を横断した学習方法や教育内容の改善と充実とが求められている。

国語科としては、現行の学習指導要領で設定された「伝統的な言語文化」が「我が国の言語文化」（伝統的な言語文化、言葉の由来と変化、書写、読書の 4 領域）と整理されて内容の充実が図られ、小学校・中学校を通して育成すべき内容と位置付けられている。また他教科においても地域の主だった文化財や年中行事に対する理解（社会科）、伝統音楽や和楽器に対する理解（音楽科）、和食や和服に対する理解（家庭科、技術・家庭科）等と「我が国の言語文化」の内容との関連が認められ、教科を横断して学習を深める契機を生み出すことが可能である。加えて各教科でコンピュータ等を活用した学習活動の充実が目指されていることは、国語科の学習において主体的に学ぶための ICT 活用の可能性を見出す機会となっている。

### 1.2 ESD に基づく教育的な意義

グローバルな観点から捉えるならば、ユネスコが推奨する「ESD (Education for Sustainable Development [持続可能な開発のための教育])」に基づく見方も重要な要素となる。ESD が目指している項目は多様な内容からなり、その 1 つに「世界遺産や地域の文化財等に関する学習」が示されている点に留意すべきだろう。このように地域の文化財（地域文化資産）を活用した学習は、児童・生徒の生活基盤である地域が内包する価値を再確認し、社会の中で生きていく力を育成するための基盤を形成することとなる。さらに地域を実際に見て学ぶことによる体験知は、座学によって習得する知識とは異なる専門知として個々の確かな学びを実現することとなる。

このような ESD と関連する教育プログラムは、大学生を対象とした内容である「信州の地域文化資産を活用した「信州学」学修プログラムの構築」（平成 28 年度学内版 GP、代表：西）によって実践・検証済みであり、初年次教育での成果が認められた。しかも、本実践は中等教育の専門科目（「日本文学基礎」「漢文学基礎」等）において実践内容の深化が目指されており、座学によって習得する知識と体験知とを統合することで得た学習成果を、ICT 機器を活用して発信・交流することとどまらず、複数の専門科目に関わる実践事例として大学の授業連携という側面からも教育的な意義を有すると位置付けられる。

本稿は、以上のような教育的な動向や先行実践に基づいて、国語科における ICT を活用した授業実践を報告するものである。

## 2. 研究方法及び実践の状況

### 2.1 事前準備

本年度の「長野文学散歩」の行程に合わせて、学内顕彰碑（小林）、往生寺や境内の文学碑（友田）、善光寺や境内の歌碑及び回向柱等（西）に関するPower Point 及び当日配布資料を作成した（（ ）内は担当者名）。

また、平成29年度部局重点事業計画（☆☆☆計画）プロジェクト「図書館を核とする学修支援・情報発信プロジェクト」と連携して、教育学部附属図書館入口に、学部のホームページで公開している「信大教育学部から門前町さんぽ」を拡大プリントの上関係資料とともに掲示したり、館内に関連図書を展示したりすることで本実践の周知に努めた。

参加予定の学生には、今年度の「長野文学散歩」では、今春告示された学習指導要領が示す教育動向「主体的な学び」の実現に向けて、参加者の主体的な活動を通して体験的に学びを持つ機会にしたい旨eALPS を通じて連絡し、当日の事前学習会に臨めるよう留意した。

### 2.2 協働学習スペースを活用した事前学習会

実施日時、参加者並びに事前学習の内容は以下の通りである。

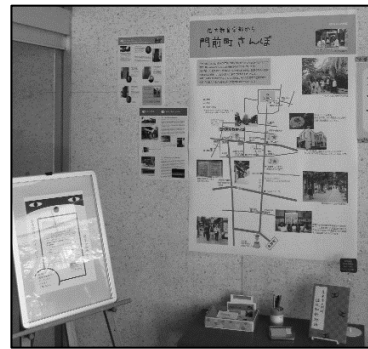


写真1 図書館入口の掲示物



写真2 関連図書の展示（図書館）



写真3 事前学習会の様子

日 時：2017（平成29）年6月26日（月）16：20～16：40

参加者：24名（国語教育コース2年生22名，他コース2年生1名／4年生1名）

フィールドワークへ出かける前に、図書館2階の協働学習スペースにおいて、Power Point（「資料1」参照）及び配布資料を用いながら、学内顕彰碑、往生寺とその境内にある文学碑、善光寺とその境内にある歌碑及び回向柱等での見るべきポイントを概説した。

その上で、参加者に以下の点を確認した。

○この後出かける「長野文学散歩」の行程の中で、各自が気に入った、もしくは、他者（来年度の本企画への参加希望者を含む）へ紹介したい「長野文学散歩のココイチ！」を、各自のスマートフォンや携帯電話、カメラで数枚の写真に収めること。

○上記の形で撮影した写真を用いて、「私が薦める！西長野散策」として、スライドショーで

30 秒程度の紹介作品を作成すること。また、スライドショーにあわせて、紹介メッセージを各自の言葉で録音する、ないしはテロップをつけること。

限られた時間内での学習会及び散策であるため、本事前学習会での解説やフィールドワークの中では補えなかった内容や関連の学習に関しては、「漢文学基礎」「日本文学基礎」等の中等教育関係の必修修科目の授業で行っていく点も補足した。

## 2.3 フィールドワーク

事前学習会に引き続き、教育学部石碑公園―往生寺―善光寺の行程を 2 時間強かけて散策した。各地点においては、担当教員が解説を加えた。また、善光寺では、本堂内で案内ボランティアの解説もうかがうことができた。



写真4「浅岡先生頌徳碑」  
(教育学部石碑公園)



写真5「夕焼の鐘」(往生寺)



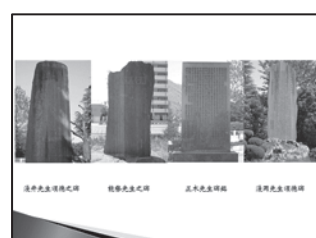
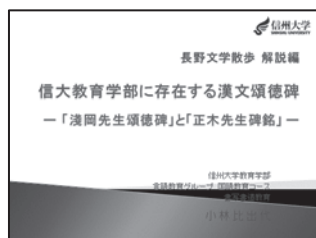
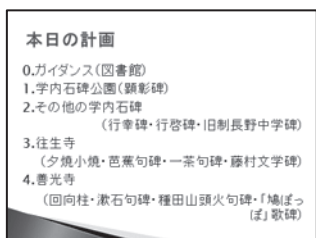
写真6「藤村碑由来」(往生寺)

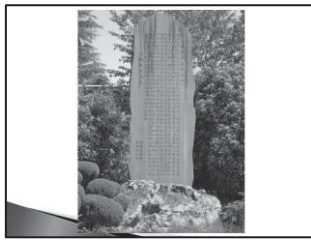
## 2.4 事後学習

事前学習の内容及びフィールドワークを受けて、紹介作品の作成を試みた。その際、制作者には以下の注意を促した。

- 紹介文の内容は、自分がお薦めするポイントや紹介する場所をどのように見てほしいか等、限られた時間内に、他者へ紹介する意識を持って簡潔に作成すること。
- 作成した紹介作品を見て意見を交流するフォーラムを開設し、自分たちの作成物を通して交流を行う予定であること。
- 作成した紹介作品は、「日本文学基礎」の eALPS 上で公開を予定していること。また、次年度以降の「長野文学散歩」参加者への事前学習教材としての活用も予定していること。

## 資料1 「長野文学散歩」当日の事前学習会にて用いた Power Point (全 32 枚中一部抜粋)





**Ⅰ、「浅岡先生頌徳碑」**  
杉浦重剛 撰 比田井鴻書 (大正10年建立)

浅岡一先生  
・嘉永4(1851)年～昭和元(1926)年  
・明治19年9月〔36歳〕  
長野県学務課長兼任で  
第4代長野県尋常師範学校長に就任。  
・明治26年11月転出までの8年間、  
長野県教育界並びに長野県師範学校の興隆に尽力。

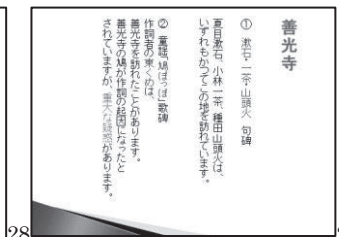
比田井天来(本名 薄 幼名 常太郎)  
・明治5(1872)年～昭和14(1939)年  
現 佐久市望月出身  
・明治30年〔26歳〕  
上京。書を日下部鳴鶴に学ぶ。  
・大正4年〔44歳〕  
東京高等師範学校 習字科講師嘱託。  
文部省検定委員を委嘱(～大正8年)。  
・大正5年〔45歳〕  
この年から2年余り、鎌倉建長寺に贅居。  
古典の勉強に没頭。新しい用筆法を発見。  
⇒「現代書道の父」

**Ⅱ、「正木先生碑銘」**  
市村環次郎 撰 田代其次書 (昭和12年建立)

正木直太郎先生  
・安政3(1856)年～昭和9(1934)年  
・明治19年〔31歳〕 長野県尋常師範学校教諭  
・明治26年 浅岡校長の転出を承けて、  
第5代長野県尋常師範学校長に就任〔38歳〕。  
・明治32年転出までの7年間、  
長野県教育界及び長野県師範学校の興隆に功績を残す。

田代秋鶴(本名 其次)  
・1883(明治16)年～昭和21(1946)年  
現 塩尻市片丘出身  
・明治32年〔16歳〕  
教員試験に合格。長野県内の小学校に勤務。  
・明治35年〔19歳〕  
東京音楽学校師範科入学。  
・明治37年〔21歳〕  
書家として丹羽浩敏に入門。  
その後、日下部鳴鶴や比田井天来の影響。

田代秋鶴(本名 其次)  
・昭和6年〔48歳〕  
東京高等師範学校講師  
・昭和12年〔54歳〕  
⇒「正木先生碑銘」揮毫年  
文部省教員検定試験(文棟)検定委員  
・昭和15年〔57歳〕  
文部省習字教科書編集委員  
国民学校芸術科習字教師用書執筆



### 3. 実践から得られた知見と考察

#### 3.1 紹介作品の傾向

事後学習で作成された紹介作品(資料2 参照)を通して、「長野文学散歩」の成果を考察する。

「長野文学散歩」の実施後、13名の参加者より紹介作品が提出された。これは2.2および2.4で述べた、文学散歩の行程で見出した「長野文学散歩のココイチ!」を各自で撮影し、スライドショーや動画による紹介作品「私が薦める! 西長野散策」にまとめたものである。提出義務のない課題であり、成績評価に含まない旨を事前に伝えていたにも拘わらず、参加者の半数以上から力作が寄せられた。全作品がテロップによる解説を加えていたほか、ナレーションを挿入した作品も1件あり、これから文学散歩に赴く視聴者(後輩)への配慮が認められた。また、複数の作品に同一の写真が用いられていることもあり、制作の過程で学生間の交流があったことがうかがえた。



作品中、写真またはテロップで言及された主なポイントと件数は以下の通りである（行程順）。

学内顕彰碑（3）、往生寺全般（11）、往生寺の地藏（3）、夕焼の鐘（6）、  
夕焼小焼の歌碑および歌詞（3）、島崎藤村文学碑（3）、小林一茶句碑（往生寺）（1）、  
善光寺全般（4）、回向柱（1）、小林一茶句碑（善光寺）（2）、夏目漱石句碑（2）、  
井上井月句碑（1）

事前学習会の様子を取り上げたものは3件だったが、そこでの解説を踏まえたと思われる作品が大部分であった。事前学習会で教員が解説したもののうち、特に多く取り上げられたのが夕焼の鐘であり、この鐘の音がモデルとされる童謡「夕焼小焼」の歌碑に言及したものも合わせると、約半数の作品が何らかの形で扱っていた。この点については後述する。

上記以外では、往生寺に至る坂道の険しさに言及したものが10件、坂を登り切った往生寺からの展望に言及したものも10件あった（資料2④）。直接的に名所旧跡を取り上げたのではないが、実は島崎藤村も「千曲川のスケッチ」および「破戒」で往生寺からの眺望を特筆しており、往生寺境内に設けられた島崎藤村文学碑には本文の該当箇所が刻まれている。小説「破戒」では、主人公・瀬川丑松が自らの師範校時代を回想し、往生寺から下界の寄宿舎に向かって友人を呼び叫んだとの描写があるが、文学散歩に参加した学生の中にも、近辺に遠慮しつつも展望台から声を飛ばしていた者があった。その解放感を伴う行為が、被差別部落出身であることを自覚した後の瀬川丑松には、全く別世界のことのように思い出されたのである。登坂の末にもたらされた眺望は、文学作品に描き込まれた、解放感とは落差のある閉塞感や孤独感を、逆説的に体感し、理解する手掛かりとなるはずである。

また、童謡「夕焼小焼」で歌われる鐘の音は、ほかでもない「山のお寺の鐘」であるからこそ聴く者の胸に響くとも言える。近代的感性は視覚を特権化する特徴を持つが、風景は視覚的情報によってのみ構成されるものではなく、音も重要な役割を担っている<sup>1</sup>。高低差を含めた距離が織りなす空間が、夕陽に染められ、鐘の響きに満たされる（丑松の声を加えてもよい）。人々に共有されてきた「音の風景」が、「夕焼小焼」には込められているのである。空間的距離を実際に体験することは、言語や音によって表象された作品（文学・童謡）をより深く理解する契機となるだろう。

紹介作品の傾向に戻ると、ポイントを絞ったものよりも、出発から目的地到着までの経緯を辿った作品が多く、どの対象に焦点を当てたかが必ずしも明確にはなっていなかった。一方で、事前学習会でも一般的な観光案内でも取り上げられていない対象に注目し、独自の視点から構成された作品もあった。たとえば、往生寺に至る坂道に散在する道標に着目した作品である（資料2⑥）。道標に刻まれた数字は、無論ある場所を基点にした距離を表している。道標を辿ることで、ある時代における地域を中心地を明らかにすることができるだろう。歩行者に益する道標は、アスファルトで固められた路上を走る自動車の高度や速度からは目に付きにくい。こうした古物を撤去せずに継承してきた地域社会の意思にも関心を持ちたい。

また、テロップやナレーション、音楽を効果的に用いて、視聴者にアピールする工夫も確認できた。たとえば、小林一茶の句碑を提示しつつ、一茶が自分の地元の先輩であるというテロップを付けた作品があった（資料2⑤）。小林一茶を歴史上の人物や教科書の中の人として捉えるのではなく、同郷人として捉え返し、より身近な存在として紹介していた。ほかに、BGMのリズムに合わせて写真をモンタージュする編集法も見られ、多くの写真を印象的に提示する工夫が見て取れた<sup>ii</sup>。

## 資料2 学生が作成した紹介作品より抜粋（一部画面比を変更した）



## 3.2 事前学習との関連

事前学習会において、往生寺の鐘が童謡「夕焼小焼」のモデルであること、同じく往生寺からの眺望に関する描写が島崎藤村「破戒」「千曲川のスケッチ」に見られること、そして善光寺の鳩に着想を得て童謡「鳩ぽっぽ」が作詞され、その歌碑が善光寺敷地内に設けられていることを解説した。これらは現地に掲げられた木札などにも記載された、周知の観光情報でもある。しかし、事前学習会ではあえてこうした情報への疑惑を提示することで、学生の主体的な学びを引き出し、文献調査によって定説を修正したり、新たな知見と出会ったりする学習効果を期待した。

提示した疑惑とは次のようなものである。まず、「夕焼小焼」の作曲者である草川信はたしかに長野市出身であるが、作詞者の中村雨紅は東京出身であり、現在の八王子市にも「夕焼小焼」のモデルとされる寺が存在すること。「破戒」では師範学校に通う主人公が山の上から寮にいる友を呼び叫んだと記されているが、果たして声の届く距離であったのかということ。「鳩ぽっぽ」は作詞者の東くめが善光寺を訪れた際の光景に着想を得たとされるが、一方で和歌山にも歌碑があり、そこには東京の浅草寺の鳩がモデルになっていると解説されていること。

提出された紹介作品の内4件がこうした疑惑に言及しており、対象への関心が強まったこと

が確認できた（資料 2③）。一方で、疑惑が疑惑のままに放置され、自ら主体的に調査して答えを見つけ出す活動に即結びつくことはなかった。今回は限られた時間での取り組みであったが、今後は参考になる具体的な文献を紹介するなど、学習のヒントをより積極的に提示するようにしたい。

### 3.3 文献調査への接続

フィールドワークで関心を抱いた対象について、文献調査を行うことで、地域の歴史文化に対するより深い理解と関心を得ることが期待できる。紹介作品で最も言及数の多かった夕焼の鐘と童謡「夕焼小焼」を基点に、実際に調査と考察を試みよう。国語科と社会科や音楽科といった教科を横断した学習の一例ともなるはずである。

「夕焼小焼」の詩は中村雨紅が八王子の駅から自宅までの風景を描いたものであり<sup>iii</sup>、歌詞に登場する「山のお寺」とは八王子市の興慶寺を指すという<sup>iv</sup>。東京都八王子市では 1982 年から 2007 年までボンネットバス「夕やけ小やけ」号が運行しており、終点の「夕焼小焼」停留所近くには中村雨紅の生家や歌碑があった<sup>v</sup>。一方、作曲者の草川信は、中村雨紅の詩を受けて、故郷長野市の往生寺から響く鐘の音を思いながら曲を作ったという。創作の起因となった寺は二山あったことになり、作詞者と作曲者はそれぞれの故郷で体験した音の風景を歌にしたのであった。

往生寺では引率教員が「夕焼の鐘」の銘文にも注目を促したが、紹介作品で取り上げたものはなかった。現在の鐘面には、「昭和二十五年八月 高岡市 鋳物師 <sup>おいごじえもん</sup> 老子次右衛門」と銘が打たれている（写真 7）。たとえばこの名前を人名辞典で調べるだけでも、往生寺の鐘の背景にある歴史に触れることができる。

老子次右衛門は富山県高岡市にある鋳物師老子家の七代目であり、明治 25 年に喜多家の職人となった。第二次世界大戦中の金属類回収令<sup>vi</sup>によって供出された梵鐘の再制作に努めた人物として知られる<sup>vii</sup>。戦時下には鍋釜から寺の鐘に至るまであらゆる金属品が回収され、兵器に作り替えられた<sup>viii</sup>。新美南吉の童話「ごんごろ鐘」<sup>ix</sup>は村の尼寺の鐘を爆弾に生まれ変わらせるべく献納する話だが、一見時局に乗った戦意昂揚の側面

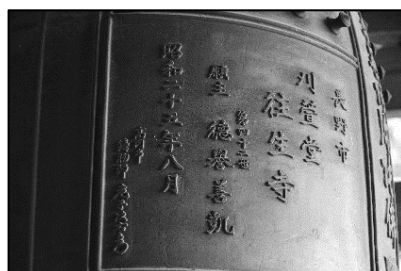


写真 7 「夕焼の鐘」（往生寺）

を持ちながらも、「庶民の信仰の象徴でもあり、会合の報知の役も果たしていたごんごろ鐘を献納しなければならない冷酷さへの批判を底にひめて」<sup>x</sup>書かれていることは、鐘との別れを惜しむ村人たちの様子が少々執拗なまでに描写されていることから伝わってくる。鳥越信はこうした時代に子供たちが作ったのであろう「替え歌」を紹介している。それは、「夕焼小焼で日が暮れない 山のお寺の鐘鳴らない 戦争なかなか終らない 鳥もおうちへ帰れない」というものである<sup>xi</sup>。否定語が重ねられる歌詞の前半部には、身近な鐘の音が刻んでいた日常生活の喪失が歌い込まれ、故郷を離れ戦地から帰ることのできない人々の不在が後半部に暗示されている



と捉えることができるだろう。替え歌では完全に塗りつぶされた「お手手つないで皆帰ろ」という元の歌詞は、戦争を経てより切実な願いを纏うことになったのである。

#### 4. 展望と課題

改定された学習指導要領の国語科では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域と「知識及び技能」に「我が国の言語文化」が設定された。ICTを活用した文学散歩は、ここにいわば「見ること」を加える試みでもある。紹介作品を作成することによる他者への伝達を前提とすることで、漫然と散策するのではなく、自らの視点で対象を捉え表現する「見ること」の力を涵養することが期待される。

また、文学作品や書道作品を含めた芸術作品の多くは、身体を持った作者が現実のある場所を五感で体験し、作品に形象化したものである。作品の起因となった場所を自らの身体で体験し、再び作品に向き合うことは、現実の物理的世界と作品の表象世界を往還的に解釈する営みとなる。こうした体験知は、作品の鑑賞においても新たな発見をもたらす可能性を秘めていると言えるだろう。

「長野文学散歩」の実施により、学生は信州大学教育学部キャンパスとその周辺の史跡等を巡ることで、自分たちが普段生活する地域の歴史文化に触れ、その中から他者に紹介したい場所や対象を発見し、ICTを活用して作品化した。今後の展開としては、3.3で一例を示したように、各自が関心を持った対象について文献調査や考察を加え、より発展的な学習に結びつけることが課題となる。また、学生が相互に紹介作品を鑑賞できるようにeALPS上で公開し、意見を交わすフォーラムを開設する予定である。そうして得られた知見は、次年度以降の文学散歩にも活用していく。

#### 附記

本稿の主な執筆分担は次の通りである。1 西一夫、2 小林比出代、3・4 友田義行。  
紹介作品の著作権と写真の肖像権については制作者および参加者の許諾を得た。

#### 謝辞

紹介作品の作成にあたっては国語教育コース2年生（2017年度）の協力を得ました。  
記して感謝申し上げます。

## Abstract

This paper presents a report on the practice of a study program intended to encourage students to reappraise the value of regional cultural resources through the use of ICT, in order to realize the “independent and dialogic deep learning” indicated in the new Courses of Study. Effective learning was achieved by combining practical study in the Faculty of Education with specialized study, as well as through the interconnection of various classes and facilities. As well, students used ICT effectively after the program to create work, demonstrating to some extent the meaningful effects of mutual interchange.

- 
- i R.マリー・シェーファー著、鳥越けい子・小川博司・庄野素子・田中直子・若尾裕訳『世界の調律 サウンドスケープとはなにか』平凡社、2006年5月。シェーファーによると、サウンドスケープ（音環境）は基調音・信号音・標識音に分類され、寺院の鐘（西欧）は特定のコミュニティの人々によって尊重され注意されるような特質を持った標識音に区分される。
- ii リズムを軸にした編集法は映画芸術が早くから試みてきた技法でもある。デイヴィッド・ボードウェル、クリスティン・トンプソン著、藤木秀朗監訳『フィルムアート』名古屋大学出版、2007年9月、pp.288-290
- iii 中村雨紅は作詞の状況についてははっきり覚えていないとしつつ、東京から故郷への往復に八王子から実家までへの約四里を徒歩で移動していた際、その途中で日が暮れた山国での光陰が直接の原因になったのではないかと語っている（中村雨紅「わたしの手帖 「夕焼小焼」を作詩する頃」『教育音楽』1956年8月号）。
- iv 小山秀司「CAMERAANGLE 中村雨紅「夕焼小焼」」『国土交通』2001年11月号、大賀博寛・吉村温子『教科書にでている童謡・唱歌のふるさと① 1・2年生のうた』岩崎書店、2006年4月、pp.22-23 なお、「夕焼小焼」のモデルを巡っては、上恩方の興慶寺のほか、下恩方の観栖寺、八王子の室生寺との説もあり、それぞれに中村雨紅の筆が入った歌碑や梵鐘が設けられている。
- v 「夕やけ小やけ」号は2009年11月に観光施設「八王子夕やけ小やけふれあいの里」に寄贈され、新たな観光資源として活用されている（「ボンネットバス「夕やけ小やけ」号が最後の運転」『八王子経済新聞』2009年10月29日号）。
- vi 金属類回収令は1941年8月29日に作成された勅令第835号によって示達された。原本の画像が国立公文書館アジア歴史資料センターのHPで公開されている。 <https://www.jacar.go.jp/>
- vii 上田正昭監修『日本人名大辞典』講談社、2001年12月、p.322 なお、善光寺の梵鐘も老子次右衛門の代表作である。
- viii 先述した中村雨紅の故郷にある興慶寺の鐘も戦時中に供出され、1968年に新しく「山の寺の鐘」が铸造されたという（注iv 小山秀司参照）。厳密には往生寺の鐘も慶興寺等の鐘も作詞・作曲の起因になったものとは異なるということになる。
- ix 新美南吉『おじいさんのランプ』有光社、1942年3月
- x 滑川道夫「解説 晩年（戦時中）の創作活動とその作品群」『新美南吉全集』第3巻、牧書店、1972年8月、p.283
- xi 鳥越信『子どもの替え歌傑作集』平凡社、1998年7月、pp.110-111

(2017年8月21日 受付)